人口減少社会における地域を支える人材を育てる後期中等教育のあり方

―　持続発展可能な地域をつくるために　―

川上　公一*

1　矢掛町における持続発展可能性

矢掛町は、岡山県南西部中山間地域に位置し、高梁川の支流小田川の流域に開けた人口１万５千人の町で、江戸時代山陽道の宿場町として栄え、当時の本陣、脇本陣が今も旧姿をとどめる歴史と文化の町である。近年、過疎化・少子化が進行しており、定住促進・企業誘致等の取組も熱心に行っている。

岡山県立矢掛高等学校（以下「矢掛高校」）は、明治 35 年に県内４番目の旧制中学校として開校された岡山県立矢掛中学校以来の伝統を受け継ぐ歴史ある学校である。

矢掛高校は、平成 20 年からユネスコスクールとして ESD「持続可能な開発のための教育（Education for Sustainable Development）」に取り組んでおり、平成 23 年には、第１回ユネスコスクールＥＳＤ大賞を受賞している。

伝統に甘んじているだけでは持続発展はない。常に状況を把握分析し、的確に判断し、戦略的に行動することが求められる。また、自らの考えを持って、新しい社会秩序を作り上げていく、地球的な視野を持つ市民を育成するための教育に期待が寄せられている。

地球的な視野を保って地域の活動に参加すること、あるいは地域の地道な活動を通して身につけた手法や能力をより広い状況の中で発揮できるようになること。それが矢掛高校の目指す ESD である。

*岡山県立矢掛高等学校

２　学校特設教科「やかげ学」

矢掛高校では、普通科探究コース・総合コース、地域ビジネス科がスタートして４年目を迎える。一人一人の生徒によりきめ細やかな指導が可能なシステムを構築し、各コースで柱となる目標と特色ある取組を設定している。

総合コースでは、学校設定教科として平成 22 年度から「やかげ学」を開設している。「やかげ学」は、学校設定教科「環境」の中から、地域との連携やボランティア活動の部分を分化・発展させた教科である。地域での活動体験を通して、達成感や充実感を持たせるとともに、自己の進路を模索する活動に結びつけることをめざしている。職業体験を中心として地域での様々な体験活動を通じて、多様な立場の人や異世代の人とふれあい、地域社会における自分の役割や立ち位置を自覚するような活動を実施している。その過程で、人との心の繋がりや社会との繋がりに気づき、自尊感情のある自立した人間へと成長させていきたい。「かかわり」「つながり」を尊重するなかで、社会的・職業的に自立し、社会の中で役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現するための力を身につけさせていくであろう。

「やかげ学」は、矢掛町と本校が協定を結び、矢掛町の施設において総合コース生徒が職場実習を体験する学校設定教科で、毎週木曜日の午後に実施している。第２学年の「やかげ学Ⅰ」から第３年の「やかげ学Ⅱ」にかけての２年間学習する。「やかげ学Ⅰ」は７月まで、矢掛町についての講義を中心に学習し、９月から実習を行う。「やかげ学Ⅱ」では、７月まで実習を行い、９月から活動のまとめとプレゼンテーションの準備を行い、最後に施設の方や地域の方、中学生を対象に報告会を実施し、活動を終える。実習は、過疎化が進む矢掛町において課題となっている福祉・教育・農業及び医療関係に特化しており、卒業時の進路決定において、それらの領域への進学就職が増加したのは、大きな成果である。さらに、上級学校卒業後、地元に就職し地域に貢献する人材も増えている。

小学校での「やかげ学」

フルーツトピアでの「やかげ学」

取組の特色

①矢掛町、矢掛町教育委員会と協定を結び、地域と密接に連携した活動である。

②「矢掛町とは」の講義の講師はすべて矢掛町の職員による出前講座である。

③１年間（２学年にわたって）約３０回という長期間にわたって実習を行う。

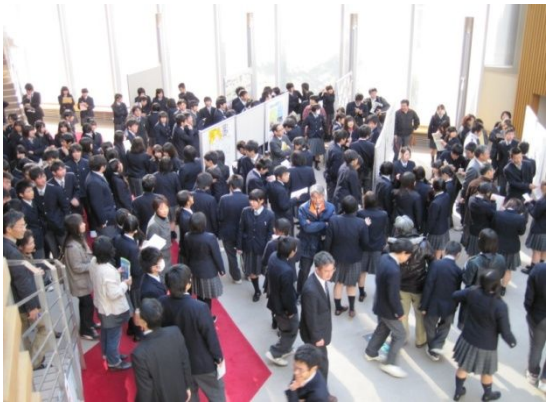
④評価基準に基づき各施設で生徒の活動状況を観察して評価してもらう。

⑤本校生徒への効果だけでなく、受入施設側にも効果が期待できる活動である。

⑥文化センターの大ホールで報告会を実施し、関係者以外の地域の方や中学生にも活動を知ってもらう。

地域との連携を重視した様々な形態の学習活動を通して、他者との関係性、社会との関係性、自然環境との関係性を認識する。また社会に積極的に寄与する能力を育成し、持続可能な社会が実現できるような価値観と態度を養うことを目的としている。「持続発展教育（ＥＳＤ）」を視野に、単なる地域貢献活動にとどまらず、持続可能な社会の担い手を育成していく。

「やかげ学」発表会プレゼンテーション



「やかげ学」発表会ポスターセッション

普通科総合コースを選択する生徒は、他のコース･科と比べて進路選択に対する意識が希薄で、「何とかなる」と思いがちである。「やかげ学」を通して次第に現実を認識し、この地域では就業の機会も少なく世の中の実態や厳しさを自分のこととして悩み始める生徒も出てくるようになる。「やかげ学」を中心に各教育活動の中にあるキャリア教育の機会を意図的・系統的につないでいくとともに、地域の諸団体･機関と連携し、就労機会の確保に向けた活動も行っていきたい。

３　地域ビジネス科「総合実践」

矢掛高等学校地域ビジネス科は、平成２６年３月に初の卒業生を送り出した新しい学科であるが、旧岡山県立矢掛商業高等学校商業科の流れを継ぐ地域に密着した学科である。矢掛町の特産品を加工した商品を町内の民間業者と協働して開発・生産・販売したり、企業などの職業現場において実際に仕事を体験するインターンシップを実施したりする活動を通して、さまざまな立場の人と関わりをもち、互いに支え合い生きていくことの大切さや、自分の在り方・生き方を見つめ直し将来の社会人としてよりよく生きる態度などを伸張し、将来にわたって地域社会を支える人材としての自覚と態度を身につけてきた。

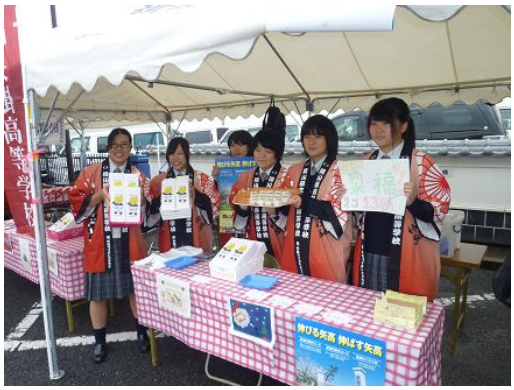
その一方で、商業基礎教科にも精励し、全商簿記検定・情報処理検定・電卓検定・ＩＴパスポート国家試験等でめざましい結果を残している。社会貢献や社会的責任を自覚し、矢掛町をはじめとする小田川流域を支える地域社会の次世代を担う人材をとして大きく成長している。

総合実践では、一校一品運動に熱心に取り組み、平成 24 年度は、洋菓子店「ローザンヌ」の協力を得て、第２学年の授業の中で開発した、ゆず風味のパウンドケーキ【ふわゆずぽ】を販売した。「ふわゆずぽ」はタウン情報誌「Ｗｉｎｋ」に掲載され、現在も順調に発売されている。

タウン情報誌「Ｗｉｎｋ」

平成 25 年度は、和菓子店「清邦庵」の協力を得て、矢掛特産の梨を使った大福（梨福）も販売した。梨福も季節販売商品として実際に販売を継続する予定である。

梨　福


販売実習

平成 25 年度、地域ビジネス科３年生は、矢掛の歴史的な町並みで商いを続けているすべての店舗をインタビュー調査し、備中矢掛の街並みをよくする会の協力を得て「老舗紹介マップ」を作成した。

商業科の指導に当たっては、実践的・体験的学習を重視するとともに、地域や産業界との連携・交流を通じた実践的な学習活動や就業体験を積極的に取り入れることが求められている。今回の活動は、その実践事例として高く評価されている。

平成 26 年度は、街並みの商店と地区内の一人暮らしの高齢者を対象に、地域ビジネス科新３年生が配布することになった。活動が次の学年に引き継がれていくことで、地域に密着した持続発展可能な教育活動となっていくのである。

老舗紹介マップ

街並みをよくする会の活動報告書では、次のように評価している。

１）若い感覚でまちづくりを行う時代

経済機構が大きく変化するなかで地方の商店街はシャッター街と化している。しかし矢掛の商店街には今なお地域に密着した商店が軒を連ね商いをしている。住民高齢者にとってありがたいことである。

会としても老舗紹介マップを作成することにより商店街の活性化の一助になればと思っている．マップ作成にあたっては矢掛高校地域ビジネス科の生徒に依頼して調査・企画を行った．若い感覚でまちづくりを行う時代と考えている。今後、若人達の協力を求め勉強会などをする必要がある。

店舗でのインタビュー

そして、平成 26 年度、新たに矢掛の街並みの空き店舗・空き住宅の調査・再利用を行うプロジェクトを街並みをよくする会・矢掛町・矢掛高校で立ち上げる。矢掛高校の役割は、若者の意見を再利用に取り入れるための提案の部分を担う予定である。その中には、地域ビジネス科による店舗運営も視野に入れている。

３　地域貢献活動

江戸時代の宿場町矢掛は、大正から昭和にかけて、旧制矢掛中学校、矢掛女学校を中心とした学園町であった。近隣から学生が集まり、寄宿舎で暮らす生徒もいて、若い力がみなぎっていた。矢掛高校には白壁の塀、校門、明治記念館など当時をしのぶものも現存し、町並みの一部となっている。

かつてのように地域に若い力が充満し、活気を生み出す。そのような地域活性化の取組に積極的に参加することこそが、矢掛高校に課せられた使命だと考える。

生徒たちは積極的に町に跳びだしていく。大きな声であいさつができるようになってきた。地域の行事にはなくてはならない存在になってきた。過疎化・少子化が進む中山間部では、高校生は大きな戦力である。矢掛町の中だけではなく、小田川流域全体でこのような取組を広げることができたならと考えている。

「ボランティア活動」では、個人の自発性は重要な要素である。学校の働きかけや地域社会からの活動の場の提供がきっかけとなって個人が活動を始め、活動を通じてその意義を深く認識し、さらに自主的な活動に広がっていくことが大切にしたい。

矢掛高校では、生徒が教育課程外の時間などを活用して自主的に取り組む「地域貢献活動」を奨励し、サポートしている。「自分の力で、したいこと・できること」を見つけ、地域貢献活動を通して、豊かな人生を送るためのきっかけの一つとなることを期待している。

キッズ広場スタッフ

井原線得々市こども科学教室

小学校夏休み学習支援

大名行列

対象	取組の具体的内容及びそのねらい	活動先	参加者数
１・２年	やかげ宿場まつりに備え町内の清掃活動を行い、奉仕の精神と有用感を養う。	矢掛町市街地	320人
１・２・３年	近隣の老人福祉施設の清掃、矢掛駅と公園の清掃を行い公共心や自己肯定感を高める。	たかつま荘・矢掛駅・ネバーランド	250人
１・２年 総合コース	夏の学校支援ボランティアを行い、コミュニケーション能力を養う。	矢掛町内全小学校	320人
２・３年 総合コース	学校設定科目「やかげ学」の実習により、キャリア教育を行う。	矢掛町内各施設	160人
２年地域ビジネス科	インターンシップにより職業観の育成を行う。	矢掛町内各施設	40人
１・２・３年	矢掛町のイベントなどで年間３０回以上のボランティアに参加することで、地域を愛する心を育む。	矢掛町内 各イベント	400人
高校生がボランティアリーダーとなる活動に校種間連携として参加した小中学生数			500人

平成25年度に実施した社会貢献活動の具体的内容及びそのねらい等

矢掛高校では、学校評価アンケートで社会貢献活動についての項目を設けている。平成25 年度、第1学年では 60%が肯定的な意見を書いているが、学年を追ってその割合は高まり

第3学年では 80%が肯定している。地域貢献活動が進路意識向上に役立っている。また、普段の学校生活においても、地域との連携を意識し、規範意識や言葉使いなど気を付けている生徒が増えてきた。矢掛高校の取組は量的には十分であるが、生徒の学習態度やキャリア教育に一層資するように、事前事後の学習を充実させる必要がある。

また、ボランティアは学校教育の一環という理解がなく安易に要請してきたり、動員組織のように人数を指定してきたりする場合もあるので、ボランティアの申し出があった場合、管理職と地域連携担当教員が話し合い、教育的効果や安全性なども含めて受け入れるかどうかを検討し、断る判断もしている。また、生徒の自主的判断を尊重するので希望人数に達しなかったり、参加者がいなかったりする場合もあることを告知している。

４　校種間交流・連携

平成 25 年 9 月 21 日「第36回全国町並みゼミ倉敷大会・矢掛分科会」が矢掛町で開催され、矢掛小学校・矢掛中学校・矢掛高校の児童・生徒が大会のサポートをした。全国各地から100名以上の参加者があり、矢掛の町並み案内などをした。

この大会は「全国町並み保存連盟」が毎年、全国規模の大会として主催しているもので、各地の町並み保存や町並み活用の様子を見学し、歴史を生かしたまちづくりについて情報交換や事例検証を行っている。ねらい達成のためには、若者の視点が必要になる。地域発展に興味をもつ若者を各校で募集した。セッティングされた観光案内の披露ではなく、若者の生の声を発信したいと考えたのである。街角でポスターセッションを行い、町並みの活用に向けての意見・提案を行った。説明だけでなく、参加者の意見も聴くなど、双方向性を重視した。3校種合同することで、町並みへの想いをつなぎ、持続発展可能な学びを構成することができた。

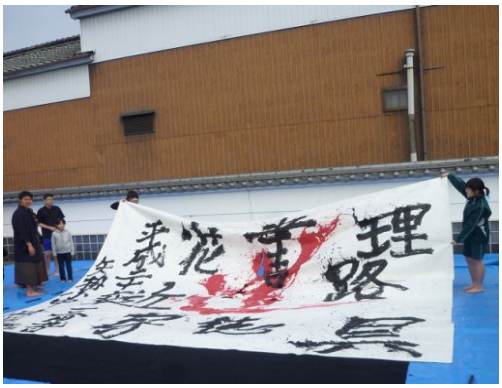
脇本陣での案内（小学生）

街角ポスターセッション（小学生）

全国町並みゼミでの矢掛小学校・矢掛中学校・矢掛高校の活動の様子は高く評価された。これをきっかけとして、３校の有志をメンバーとする『やかげ　町づくりこども連合』を

結成した。魅力的な町並みを作るために、こどもの視点からさまざまな提案を行ったり、行事に企画参加したりするプロジェクトを実施しようと考えている。こども連合では、特に固定されたメンバー制をとらず、活動を行うたびに、メンバーを募集し活動する組織である。また、小学生の活動を中高校生が協力・支援したり、高校生が実施する活動に小学生が参加したり、中学生が行う活動に小学生・高校生がそれぞれの立場から協力したりすることを計画している。

平成 26 年 3 月 9 日『やかげ　町づくりこども連合』の発足を記念して、矢掛商店街ポケットパークで記念イベントとして書道パフォーマンスを実施した。これはまちかどギャラリーで開催している矢掛高校書道部展と連働したものである。地面いっぱいに広げた紙に、大きな筆で力強く一気に書いていく。小学生も負けてはいない。ギャラリーも大勢集まってくれた。大書を３枚仕上げた後、ワークショップを開催した。小学 1 年生から８０歳を過ぎた方まで一字の大書に挑戦した。街角にこどもたちの歓声が響き渡った。



書道パフォーマンス

最初は各校の教員が中心になり活動していたが、想いを同じくする民間の方も参加されるようになり、平成 26 年度からは、新たな展開を始めている。

平成 26 年 5 月 17 日【矢掛で育つ子どもの未来についてはなすカフェ】が、やかげ町屋交流館谷山サロンで開かれた。「矢掛で育つ子どもたちが、周りの大人や地域ともっとつながり、もっとすてきな町にするために年齢や性別、学年や役職・・・いろいろな垣根を取り払って、矢掛についてみんなでワイワイ話し合おう」というイベントである。矢掛町役場からは、ヤカッピ～と町長が参加した。引き続き 6 月 7 日には、「矢掛の町の価値を見つけるブランズディ」が開催され、小学生・中学生・高校生が一緒になって、矢掛の新しい価値（ブランド）について話し合った。これらの活動は、民間ボランティアの企画く・運営である。

ブランズディでの提案

矢掛で育つ子どもの未来についてはなすカフェ

矢掛の町の価値を見つけるブランズディ

夏祭り・大名行列・雛流し等の既存の行事に参加するだけでなく、こどもたちが自分たちで考え、企画した活動も積極的に行っていくことを考えている。

矢掛の町並みにこどもの声が響き、こどもが走り回り、ときにはお年寄りが、こどもを叱る場面も出てくる。それが本来の活気ある町並みだと考える。異年齢の集団を組織することで持続発展可能な教育を実現させるとともに、活動を通して地域に貢献する意識をもった人材を育成したいと考えている。

５おわりに

矢掛高校は、【地域を支え　地域に支えられる高校】でありたいと考えている。校歌に歌われる小田川のせせらぎ。小田川流域こそが本校の「地域」である。豊かな小田川の中流にある矢掛の地は、小田川流域を後背地として栄えてきたのである。

平成 18 年に改正された教育基本法には「学校、家庭及び地域住民等の相互の連携協力」の規定が新設された。「地域を支え　地域に支えられる学校」こそが、これを具現化するものである。過疎化・少子化が進む中山間部では、高校生は戦力である。地域に積極的に進出することで、地域が活性化するとともに高校生自身もキャリアを身につけ、自らの進路実現に資する。そのような「Win-Win の関係」を構築していくことが、地域を支える人材を育てるために最重要であると考える。

中国地方は、中山間地域の居住人口が全体の二割強を占めるが、人口減少を理由に各種施設が集約されてサービス水準が低下すれば、一層の人口流出が進みかねない。特に中山村地域にとって欠かせないインフラストラクチャーは、交通・医療・教育であると考える。学校の持続発展が地域の持続発展を担保するのである。そのためにも、地域に信頼され、期待される開かれた学校づくりを一層進めていかなければならない。